

社会・文化

経済

政治

WORLD

連載

- 10 世界のキーパーソン
- 11 国内人情情報
- 27 Book Reviewing Globe
- 40 広告を裏読みする一本間龍
- 42 新・不養生のすすめ—大西睦子
- 51 西風
- 63 交差点—読者の声・編集者の声



戦時中、強制徴用されて南洋の島々に散った朝鮮人の遺骨は、今も膨大な数が現地に残されたまま。韓国は米国に働きかけ、政治問題化する腹積もりだ。長年続く厚労省の杜撰な遺骨収集が「日本叩き」の標的に。(114頁)

- 102 社会・文化 ● 情報カプセル
- 104 コレラ拡大「養豚業界」の深い闇—利益至上主義「安倍農政」の大罪
- 106 室内楽の若き新星「葵トリオ」—欧州が認める才能を日本は冷遇
- 108 医薬品審査を覆う「製薬マネー汚染」—贈賄まがい「許す厚労省」の宿弊
- 110 駒澤大学に忍び寄る「中国の影」—北海道系列校「無償譲渡」を巡る謎
- 112 新たな社会の脅威「ニュース砂漠」—新聞「消滅地帯」広がる米国の荒涼
- 114 朝鮮人軍属「遺骨収集問題」—破滅の日韓関係「第三の火種」
- 92 皇室の風—岩井克己
- 94 日本の科学アラカルト
- 96 美の艶話—齊藤貴子
- 98 本に会う—河谷史夫
- 100 をんな千一夜—石井妙子
- 118 マスコミ業界ばなし

米国「同盟国切り捨て」の冷酷

— 加速度増すトランプ「孤立主義」 —

- 6 特別レポート
- 12 米民主党が「トランプ弾劾」へ猛進
 - 増え続ける疑惑に「前例なき包囲網」
- 14 南北統一へ向かうアイルランド—英連邦「崩壊の連鎖」は止まらず
- 16 英国「対口秘密情報戦」の内実—暴露された陰の組織と「黒い手口」
- 18 WORLD ● 情報カプセル
- 22 「はしか大流行」の背後にロシア—「反ワクチン運動」煽るサイバー工作
- 24 仏国策会社ルノーの「黙示録」—新会長はゴーン以上の「危険人物」
- 28 ガンジー家「王女」政界進出の衝撃—モディ政権転覆への「最終兵器」
- 30 台湾・蔡英文「公式訪米」の可能性
 - 米中関係「新たな難題」が浮上
- 32 米朝「非核化ごっこ」は長続きしない
 - 「フロンティア」を温存する米朝
- 34 ウイグル弾圧で暗躍する米「死の商人」—中国と「トランプ人脈」の密約
- 36 人民元暴落危機の緊迫
 - 「成長なき中国」が凍らせる世界経済
- 38 連載「現代史の言霊」三月の彗星—ベルスコーニ(一九九四年)

NATO離脱とシリア・アフガンからの米軍撤退は、トランプの宿願だ。さらには在韓米軍も「いつか撤収するかも」と述べた。米軍に安全保障を依存する国々が怯える中で、日本だけが例外といえるのか。(6頁)



消費税を2度増税した首相——が関の山だろうか。拉致問題、北方領土、成長戦略、地方再生、憲法改正、どれも先真つ暗だ。安定ではなく停滞。それに気づかぬ国民に支えられる、長さだけが取り柄の政権。(48頁)

- 44 政治 ● 情報カプセル
- 46 自民党本部の「牢名主」元宿仁
 - 金庫と裏情報を握る「永世事務総長」
- 48 レガシー「無し」の安倍長期政権
 - 外交・内政「功績ゼロ」の恠しい宰相
- 52 連載「政界スキャン」落日の「暴走老人」麻生太郎
- 54 アベノミクス「好調偽装」の悪質
 - 成長率で「大ボラ」吹く内閣府
- 56 杉田和博副長官「が官邸を去る日」—安倍「強」ブレイク喪失の危機
- 58 連載「罪深きはこの官僚」安井正也「原子力規制庁長官」—福島「反省なき」原発推進のプロ

- 64 「金相場」上昇に注目すべき時—ドル信仰「再崩壊」に備える「手」
- 66 関西電力が「新電力潰し」で大暴れ
 - 原発再稼働で「地域独占」維持を画策
- 68 東京商品取引所「濱田隆道」の末路—古巣「経産省」が独裁者排除へ
- 71 連載「クローズアップ」泉澤清次「三菱重工工業次期社長」—社業窮地で登板する「超軽量人材」
- 72 連載「企業研究」新日鐵住金
 - 社名変更でも「老い」との闘い
- 76 三井住友銀で「不当手数料」強要横行
 - 「マチ金」並みの手口で貪る暴利
- 78 経済 ● 情報カプセル
- 82 連載「地方金融の研究」山形銀行—ジリ貧でも「同族支配」
- 84 富士通が銀行システムで「惨敗」—金融界が見捨てた「三流ベンダー」
- 86 トヨタ「総務部長ワイン会」の怪人脈
 - 章男を支える「三河の忠臣」たち
- 88 自動車産業「世界再編」の最終章—日本陣営は「蚊帳の外」の公算
- 90 ファーウェイ「排除同盟」は成功しない—「トランプ追従」中国叩きの盲点

「住金パージ」が完結し、日本製鉄の社名で再出発。前途を待つのは、海外M&Aでの難題と国内設備の深刻な「老朽化」だ。共に業績を下押しし、株価を低迷させる要因。自身が買収される危機の再燃も。(72頁)

